

■モーツァルト／ ピアノ協奏曲第 20 番 二短調 K.466

モーツァルトの音楽をオペラから器楽曲にいたるまで、まるごと楽しむ現代人には不思議なことだが、19 世紀後半にはモーツァルトのピアノ協奏曲はほとんど演奏されなかったという。ソリストの華麗な技巧がもてはやされ、音の厚みによる迫力が追求されたロマン派の協奏曲に比べて、簡素なモーツァルトの協奏曲は練習曲のように感じられたらしい。1891 年に作曲家ライネッケが書いた本によると、唯一の例外が第 20 番二短調の協奏曲。この作品だけは時おり演奏された。モーツァルト時代には珍しく短調で書かれたこの曲にはロマン派の音楽家たちが好んだ激しい情感の表出がみられる。ウィーンへやってきて自由な暮らしを勝ち得たモーツァルトは、貴族の子女にピアノを教えながら新作を次々と書いていた。ザルツブルク時代とは比べ物にならないほど忙しい生活だったが、彼の心は晴れやかだったのだろう。インスピレーションが泉のように湧き出て、傑作生まれていく。1785 年 2 月 11 日にウィーン在市立集会所で初演された第 20 番の協奏曲は、ようやく前日に完成された。まだ、浄書のインクが乾いていない、できたてほやほやの作品に、息子の新居を訪問した父レオポルトは感激している。二短調の第一楽章はオーケストラが暗く悪魔的な楽想を奏で、ピアノ独奏が悲哀に満ちた主題を歌う。変ロ長調の第二楽章は優しく甘美なロマンツェ。ト短調の中間部では悲しみが迸り、著しい対比をなす。二短調のフィナーレは悲劇的な表情に満ちている。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成

フルート 1、オーボエ 2、ファゴット 2、ホルン 2、トランペット 2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

※スコア上の表記